

時評

「無資源国の自覚」

よきの
与謝野 馨

(衆院議員、元財務相)

日本人は自分たちの社会が持っている豊かさがどういふものであるか、にもう一度、目を向けないといけない。日本は気候が温暖で、四季それぞれの美しさに恵まれているが、石油・ウラン・ウウム・鉄鉱石・希少金属など近代文明に必要な資源がない国でもある。つまり、この国の豊かさは天与のものではない。このことを忘れると国の運営を失敗する。

この国の豊かさは、我々の先輩たちが汗と努力で築きあげたものだ、という自覚が必要なのだ。水前寺清子は「ぼろは着ても、こころの錦」と歌うが、やはり一定水準の豊かさがないと、人々の安心・安全は確保できない。安心・安全の基礎である社会保障制度も続けられなくなる。社会の豊かさは芸術・文化が花開く基礎であり、国民一人ひとりが自分の個性を最大限に生かすチャンスがある社会を形成できるものともなる。

豊かさはマネーゲームで獲得するものではない。地道なものづくりやサービスを通じて豊かさをつくりあげることが大切だ。カネでカネを生むマネーゲームは所詮、虚構の世界だ。現実の世界で生きる者は汗をかいて努力をし、独創力を発揮して、新しいものに挑戦する精神を保持していないといけない。マネーゲームにうつつを抜かしていると、この国は下降線をたどる。

日本の経済がうまくいっていたのは、各国がつくるさまざまな品物に比べて、日本製品が技術・品質・アフターサービス面で相対的優位性を保ってきたからだ。ところが、その相対的優位性が多くの分野で崩れてしまった。かつては世界一の生産性を誇った日本経済だが、今や相対的優位性を保っているのは限られた分野になってしまった、という認識を持たなければいけない。

もちろん、所得再分配政策というのは近代国家の大事な仕事ではあるけれども、鳩山内閣のように所得再分配の話だけに終始しては、日本は早晩行き詰まる。

スコットランド出身の歴史学者で米ハーバード大学教授のニール・ファーガソンが「Foreign Affairs」3・4月号のエッセー「Complexity and Collapse」で、大きな国や帝国がどのように滅んだか、という話を書いている。極めて短期間に亡びることと、過去のローマ帝国から今までの歴史を見ると、どの国、どの帝国の崩壊も財政困窮したうえで崩壊だった、という内容だ。ファーガソンはアメリカに対して警告しているのだが、この警告は日本にも当てはまる。

今こそ財政規律を守りながら、中身のある成長戦略をつくらなければならない。私は「文藝春秋」4月号に寄稿した「新党結成へ腹はくくった日本経済を救う「捨て石」になる」で鳩山政権の「六つの大罪」をあげ、「日本復活」に必要な六つの基本政策を提案した。そのような政治のダイナミックな転換にぜひ必要なのは、国民それぞれが日本の現状、相対的経済力を知り、もう一度「坂の上の雲」を目指して営々たる努力を始めることだと思ふ。今こそ、その時だ。

鳩山由紀夫首相は自分で「恵まれて育った」と言っている。我々はこの世代の人たちからは危機感が生まれたいのではないかと、と危惧している。自民党は政権政党であった時に財政規律を守り、財政再建の時期もきちんと示し、それに向かって努力をし始めていた。財政規律を全く無視する鳩山首相らの政治は「選挙のための政治」であり、「国民のための政治」ではない。

特に外交政策においては無資源国の制約をよく考えなければならぬのに、鳩山政権が日米関係を悪くしていることは大問題だ。アメリカとの信頼関係が失われると、他の国との関係にも波及する。安全保障だけでなく、文化、経済などあらゆる分野で日本の立場は悪くなる。

米中関係の悪化も日本にとって大きな懸念材料だ。中国は米国債2兆ドルを保有し、一瞬にしてアメリカ経済を破壊する力を持つてしまった。アメリカ一極で世界を支配していた時代は確実に終わった。

日本は日米同盟を正常化させ、さらに深化させ、同時にアジアでは経済面での連携を深め、「アジア共通市場」実現に向けて努力しなければならない。それこそが無資源国家日本の生きる道だと思ふ。

